爺爺の俳句ごっこ入門（三）

河村正浩

新しい句集への挑戦

もっと多くの人、俳句を作ったことのない人にも読んでもらえる句集を作るにはどうすればいいのだろうか。俳人ではなく一般の人を読者の対象とした、今までにない句集を作ることはできないだろうか。

私は旧仮名派であるが、新しい句集に関しては新仮名遣いに改めてみよう。そして、難しいと思われる漢字には振り仮名を付け、難しい言葉や季語などには説明（解説）も付けよう。一句独立した俳句だけでなく、連作をしてみよう。また俳句をどのようにして詠んでいるのか、その実作の方法の一例をルポ的に紹介してみよう。そして、作品や構成においては娯楽性や面白さを加味してみよう。これらの考えを基に、これまで書き溜めていた句をまとめ、不足部分は新たに句を作ってみよう。

ある程度、構想はまとまったが、何かが足りないと思っていたある日、八木健と柳沢京子の『こっけい俳句に咲くきりえ』（ほおずき書籍）が贈られてきた。八木健の俳句に切り絵が付けられた楽しい本で、この軽妙なコラボには人を惹き付けるものがある。娯楽性といい、素晴らしい非真面目作品なのである。「やられた」と思ったが、勢い火が点いた。

「滑稽」は俳句の本質の一つであり、文学全般に関わるもので、一口で語ることはできない。従って意識して詠めるものではない。しかし、滑稽俳句協会の活動によって、滑稽俳句の啓蒙普及が行われていることは、俳句離れの世にあって大いに歓迎すべきことである。この滑稽という俳句への大きな入口と、娯楽性という入口の二つが開いていれば、俳句は多くの人に読んで頂けるようになるのかもしれない。

令和五年八月二十日、思案に思案を重ねた結果、句集『爺爺の俳句ごっこ入門』

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

（やまびこ出版）が出来上がった。副題は「―楽しい俳句 非真面目な俳句―」とした。読者はシニアをターゲットにし、百歳時代にふさわしく、裏表紙いっぱいに「六十代は洟たれ小僧、七十代は生意気盛り、八十代は遊び盛り」と入れた。句集の概略を紹介させていただく。

第一章　声を出して読んでみよう

先ずは声を出して読み、韻律を味わってもらう。そして、頭で考えただけでは味わえない俳句の醍醐味や日本語の妙味を感じていただけたらと思う。

少し前生きていた蜂殺虫剤

少し前生きていた蠅蠅叩き

芦に角うちの嫁にも角がある

鳶は鷹産み我が家は蛙の子

愛の日のカップルあつあつアップルパイ

うたた寝とろとろとろとろと暖炉の火

第二章　つれづれなるままに

時事俳句やテレビドラマ、会話などで構成。エッセイのような日記のような、そんな俳句との付き合い方もいいのではないか。

聖戦は正義殺戮涅槃西風

ジハードの付けはユニセフ枯野かな

地球今も戦渦我らは雪達磨

惚れてんじゃねーよあいつにホーホケキョ

しょうもないなんて言うなよ孕み猫

花粉症ですの奥様よく喋る

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。